

【はじめに】

2021年11月15日、「なおみんと学ぶ！TJ入門」第5、6回のYouTube収録を行いました。

この番組は、治療的司法研究センターのYouTube公式チャンネルである「TJセンター公式チャンネル」にて7月から新しく始まったものです。

治療的司法研究センターの客員研究員である菅原直美弁護士が聞き手となり、様々なゲストの方から「治療的司法」とはどのようなものか学んでいくという企画で、「治療的司法」に携わる数々の活動内容やその活動を通して感じたこと、現状等のお話を聞くことができる貴重な機会です。1本10分ほどの動画なので、気軽に見ながら治療的司法について理解を深めることができますと思います。まだご覧になっていない方はぜひ初回からご覧下さい。

これから、学生サポーターとして直接拝見させていただいたYouTube配信動画の第5、6回について振り返りたいと思います。

【第5回 立正大学丸山泰弘教授と学ぶ「薬物依存症と治療的司法アプローチ」】

第5回は、立正大学法学部の丸山泰弘教授にお越しいただきTJについて学びました。

今回のゲストである丸山教授は、大学で「法学をベースにした犯罪学、刑事政策」をご教授しておられます。丸山教授は、「丸ちゃん」の愛称で親しまれており、学生である私に対してもとても優しく接していただき、フレンドリーなお人柄でした。ちなみに最近ダイエットに成功して5キロの減量に成功したそうです。

丸山教授は「刑事司法の中での薬物依存へのアプローチ」を特に専門として研究しておられ、アメリカのドラッグコートへ実際に足を運ばれた経験があることでも有名です。

日本においても海外においても薬物依存症で逮捕された人は再犯を重ねてしまいます。そこで、薬物関連犯罪の被告人を通常の刑事司法手続きではなく、薬物依存から回復させる治療的アプローチを裁判官の監督下で行い、その治療的アプローチを全て終了した人には罪を科さないというアメリカにある裁判制度がドラッグコートです。

次に、日本の司法手続きとアメリカドラッグコートにおける薬物依存症患者の再生、回復における違いについてお話されました。

ドラッグコートでは「try and error」を許容しており、薬物依存症と向き合い更生した後に社会に復帰できるように制度や環境を整えています。一方日本では、一度の薬物犯罪で今まで積み上げてきた仕事、家族、友人、帰る場所など全てを失ってしまい、薬物依存症患者に次のtryをさせる機会を奪ってしまっている厳しい現状があります。

最後に薬物依存症の方に対して「私たち社会ができること」について、先生は「やり直すきっかけを温かく与える」ことが1番大切であると仰っており、犯罪者=悪人ではなく、一人一人に犯罪を犯してしまった背景がある為、私たちは同じ社会を生きている人間として「罪という表面上の犯罪行為だけを見ずにその人自身と向き合う」ことが重要だと協調されていました。

## 【第6回 当事者の方と学ぶ「薬物依存症における治療的アプローチによる更生」】

第6回は、薬物を使用し実際に日本の刑事司法手続きを経験した当事者の方にゲストとしてお越し頂き、とても貴重なお話をお聞きすることが出来ました。

ゲストの方の簡単なお紹介をしますと、ニックネームは「くまさん」。大学中退後に薬物を使用し始め、30歳で逮捕。その後、出所後2回の服役を経て37歳で出所して現在は治療を継続中だそうです。

はじめに実際に刑務所にいた時のことをお話してくださいました。刑務所では全ての事に指示を受け、又行動が監視されている為、「なんでも許可を求める人間」になってしまい、主体性を失ってしまった。実際一度目の逮捕、出所後も、「違う自分」にならなければ仕事に向かえなかった為、仕事に行く度に覚醒剤を使用してしまったと。

ところが、ある本に出会ったことで考え方が変わったそうです。それは先ほど「仕事に行くために薬物を使用していた」とあったように、くまさんは「本来の自分を偽るため」に薬物を使用していましたが、本の中の「本来の自分で生きて良い」という言葉が心に響き、「自分がどうしたいか本当の感情を出していいんだ」と気づいたそうです。その気づきによって、「覚醒剤は本来の自分の感情を抑制するツール」であると感じたため、2度目の出所から現在まで薬物を辞められているとのことでした。

そして、薬物に頼らず生きていくためには「自分は自分のまま、そのまま素晴らしい」ということを知ることが大切であり、刑務所に居る人=社会に認められなかった人であり、自己肯定感が低い人が多いため、自己肯定感の向上のために自分を好きになる練習を行い自分自身のことを認め、好きになることがとても大切であると仰っていました。くまさん自身も、今回このYouTubeに出演したことが自己肯定感の向上につながり、自分を好きになる練習の一環になっているとのことでした。

最後に、くまさんが考える「更生」に必要なことは「自分を見つめ直すこと」だそうです。家族との幼少期からのコミュニケーションが後々の自分を作るので、更生のために今までの自分と家族との関係を見つめ直すことの重要性も説いておられました。

【今回学生サポーターとして参加させていただいて感じたこと】

まずは、丸山教授の「犯罪者=悪人ではなく、一人一人に犯罪を犯してしまった背景がある」とのお言葉を聞いて、私たちは犯罪者を「犯罪者」という一括りで捉え、壁を作ってしまいます。しかし、罪を犯した人が「犯罪者」として社会から忌避され、社会の一員としてコミュニティに属することができなければ、再犯を繰り返してしまう可能性が上がると考えます。更生のためには「人に認められ、人に大切にされることで、当事者が自分自身も周りの人も社会も大切にしよう」と感じてもらうことが重要であるため、私たちはより良い社会のためにも罪を犯した人を「犯罪者」と一括りにせず、相手と向き合い、認め、大切にすることをすべきであり、私自身もこの考えを大切にしていきたいと思いました。

私は現在大学四年生で就職活動を終えたばかりの身です。就職活動中に何10社もの会社の選考に落ちていく中で、自分の自信が失われていき、自分のことを認めることが出来なくなっていました。そのため、別の自分になるために薬物を使用したくまさんの気持ちにどこか共感できる部分がありました。そして、なにより「ありのままの自分に価値がある」というメッセージに私自身とても励まされました。薬物は「自分には全く関係のないもの」と考える人が多いと思いますが、心が弱っているのに奮い立たせなければならない場面は誰しもあり、そのような場面で薬物を使用してしまう可能性は普段気丈に振舞っている人ほどありうると感じました。ありのままの自分に価値があると感じられ、みんなが自分を大切にできるような社会を目指すことが、薬物使用を防ぎ依存症患者を生まないようにするために必要不可欠な事であると思います。